

かずさの博物誌

アオマツムシ

～市街地の秋の風物詩～

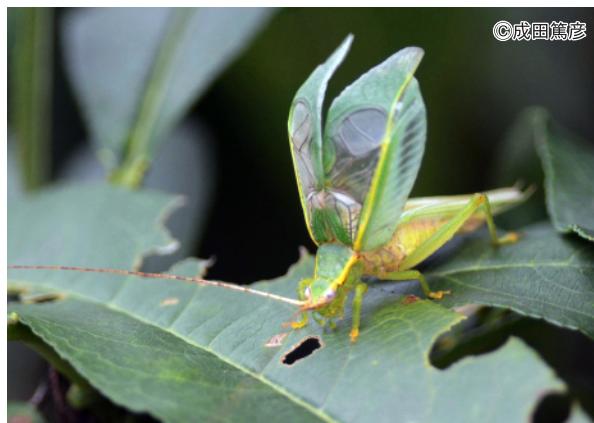
文・写真／成田篤彦

2015.11.20



▲アオマツムシが鳴く桜並木 2007年夏 木更津市

©成田篤彦



©成田篤彦

▲鳴くアオマツムシの雄 2015年9月27日

「リリーリー、リー、リー」と今夏、アオマツムシの甲高い鳴き声が街路樹から響きわたる。猛暑であつたがお盆を過ぎると正確にアオマツムシが鳴き始めた。毎年、この虫が鳴く桜などの樹を見上げるが、どこで鳴いているかわからない。

おそらく、葉上で鳴いているはずだから、下からでは見つけられないのだろう。かれらが鳴く低い樹を探すのがこの虫を撮る早道では？

今秋の夕暮れ、桜の葉が落ち始めた頃、アオマツムシの鳴き声が県道の交差点付近から聞こえてきた。

鳴き声は、家屋に接して植えられている一本の樹から聞こえてくる。

樹の高さは私の腰ほどしかない。

鳴き声が家屋の壁に反射し、大音響となっていた。それに応戦するよう、道路の向かい側の樹々からも鳴き始め、大合唱となつた。

「鳴いている姿が撮影できるのでは？」と期待感が広がつた。ところが、薄暗闇の中、密に茂つた

葉の間をのぞき込むが、どこで鳴いているのか分からぬ。ライトで照らしても見つからない。

三日目の夕方、鳴き声を追いながら、丁寧に探しても見つからない。

丁寧に探しても見つからない。

葉の茂みを探していた。そのとき、偶然、右を見たとき、雄が葉上で激しく鳴っていた。茂みの中で鳴いていると思っていたが、鳴き声が家屋や葉に反射して鳴いている箇所がつかめなかつたのだ。

人が頻繁に通るから、人には慣れていた。茂みの中でも鳴いていると思つて、長い触覚を揺らして鳴いていた。

その雄の真下の葉に雌がいた。彼は下に立てる、はねを小刻みに動かしながら、長い触覚を揺らして鳴いていた。

その雄の真下の葉に雌がいた。彼は下に立てる、はねを小刻みに動かしながら、長い触覚を揺らして鳴いていた。

我慢して鳴き続けたのかもしれない。その後、彼は茂みに潜り込み、樹内を激しく走り回つていた。

ほどの素早く、樹の葉の間を動き回つているとは思わなかつた。

そう簡単に見つからないわけだ。

さて、アオマツムシが好む、桜の葉はすでに枯れていっているのに、この樹の葉は青々としている。

樹の種類は何だろうか？ 専門家に聞いたところ、園芸種のモモの仲間では？ という答えであつた。

ところで、彼らは猛暑であつても秋が来て、冬が到来するのを知つている。

アオマツムシは卵で越冬する。親が十分に活動できる暖かい間に、交尾し、体内で卵を育て、幼虫の食物のサクランなどの樹に産卵しておかねばならない。だから、彼らは夏から次第に短くなる日の長さを感じ取り、自動的に命をつなぐ態勢に入つていく。

彼らの鳴き声は十一月頃まで上総全域で聞かれる。

アオマツムシは、中国原産の外来種だが、上総では一九八〇年代から鳴き声が街路樹などで盛んに聞くようになった。

今では、多少うるさいが、俳句にも読まれ、市街地の秋の風物詩になつてゐる。

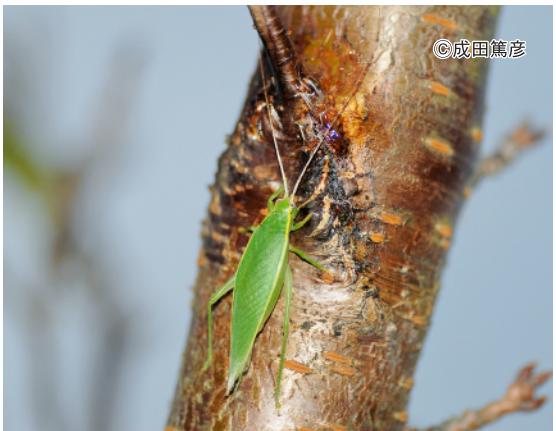
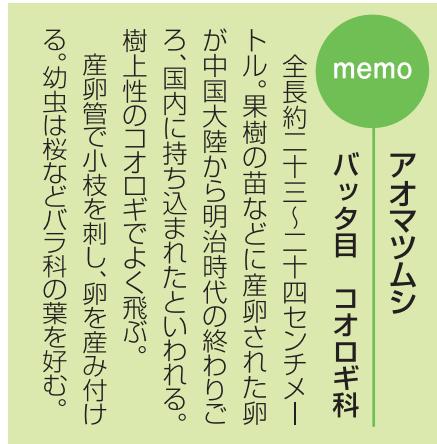
樹上性のコオロギでよく飛ぶ。

産卵管で小枝を刺し、卵を産み付け。幼虫は桜などバラ科の葉を好む。

©成田篤彦



▲アオマツムシの雄(上)と雌(下) 2015年9月27日



▲桜の幹にいるアオマツムシの雌 2006年9月19日

memo

アオマツムシ
バッタ目 コオロギ科

全長約二十三〜二十四センチメートル。果樹の苗などに産卵された卵

が中國大陸から明治時代の終わりごろ、国内に持ち込まれたといわれる。

樹上性のコオロギでよく飛ぶ。

産卵管で小枝を刺し、卵を産み付け。幼虫は桜などバラ科の葉を好む。